

幼児の運動能力について



山下 俊郎

わたくしは、幼児の運動能力は、子どもの精神発達の中で非常に大切な意義を占めていると思う。このことは、今までにわたくしの書いた論文、著書の中に、何十回となく書いてきたことである。

ところで、わたくし始め、多くの内外の心理学者が述べているように、子どもの発達には一定の順序がある。発達のシーケンスと言われているものである。運動能力の発達は、そのことを説明するのに、最も具体的ではっきりしているので、よく例に引かれている。それは「頭部→尾部」「中心→末梢」という二つの方向であるが、このうち後の方の中心→末梢というのが、とくに幼児期にかかわりを持っている。すなわち、中心というのは身体の中心および中心に近いいわゆる大筋肉を使う運動であって、全身運動あるいは大筋肉運動とわたくしたちが呼んでいるものであって、それが一通り発達して、その基礎の上に末梢の運動、具体的に言うると手先の細かい運動能力などが発達するのである。そし

て、全身運動は幼児期から小学校低学年の時期に発達する。だから、この時期に全身運動の能力が発達しないと、後になって末梢的な運動が順調に発達しないで不器用な子どもになる。したがって、幼児期には全身運動の発達を進めることが、大切な課題なのである。

ところが、この頃の子どもは総じてあまり運動をしない生活をしている。これには、住居やその近隣環境の問題も関連している。生活様式もかわりを持っている。住居が狭い、戸外でもうんと動きまわれる広い遊び場に恵まれていない、またどこへ行くにもバスやマイカーに乗るので、以前の子どものように歩くということが少ない。このようなことの結果として、運動能力が全体として発達していない。身体そのものは、太平洋戦争前にくらべて、戦後は一貫して大きくなり続けていることが、厚生省の十年毎の統計にはっきり現われており、とくに最近の昭和四十五年の

統計を見ると、著しく大きくなっている。このような身体そのものの著しい発達にもかかわらず、運動能力は一向にのびていないのである。日本保育学会が、昭和二十九年と昭和四十四年に十五年の間隔をおいて行なった幼児の精神発達の全国調査で見ると、調べた運動能力の項目二十九項目のうち、昭和四十四年度の方が優位なのは僅か三項目であり、四十四年度の方が二十九年度より落ちているものが十三項目もあり、残りの十三項目は横ばい状態であった。すなわち、全体として見るとき、運動能力は、幼児の体位が向上しているにもかかわらず、一向にのびていない、体位と関連して言えばむしろ低下しているのである。

わたくしたちは、全国的規模で調査した右の結果が、一幼稚園でどのように現われているかを、東京家政大学附属みどりヶ丘幼稚園の年長児組に、二十年間継続して行なっている体力測定のうち、昭和四十年から四十九年の十年間の結果について検討してみた。その結果、みどりヶ丘幼稚園の園児の体位は、全国平均を大きく上まわっているが、体力測定による全身運動の能力にはそれ程ののびが見られないという結論を得た。対象となった園児数は少ない年は二十七人、多い年でも三十九人であるので、一般的なことは言えないが、家庭環境も中以上であり、体位も前に述べた

通りであるのに、また十年間を通じて一貫して低下しているとは言えないが、とくに近年になって、運動能力の低下の方向をたどっている項目の多いことが注意を引いた。そして、運動能力そのものの段階値で見ても、体位の戦前の段階から言えば、はるかに上位にあるにもかかわらず、運動能力の段階値では、せいぜい平均ないしやや平均より高い段階に位するから、体位との相対的評価から言えば、運動能力は低下していることが、わたくしたちの幼稚園児すなわち極めて少数の、いわば偏った集団についても言えることが、はっきりしてきたのである。

このことから、わたくしたちが反省しなければならないことは、読者にはきわめてはっきり分って頂けると思う。すでに六十年以上も前にアメリカの進歩主義教育者たちが、幼稚園児について大筋肉運動を充分にさせることが必要であることを指摘していることを、思い返す必要がある。園の保育の中では言うまでもなく、家庭の親たちに認識を改めさせることが何よりも大切であることをわたくしは訴えたいのである。(みどりヶ丘幼稚園児の運動能力についての調査は昨年の九月十一日日本教育心理学会第十七回総会で、園主事川崎千束さんおよび大学の川合貞子さんの連名で発表したものである。)